

<b>Title</b>	信仰と責任：ハンス・ヨナスにおける無力な神
<b>Author(s)</b>	兼松, 誠
<b>Citation</b>	西日本哲学年報, 第 18 号, 2010.10 : 51-67
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3554">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3554</a>
<b>Rights</b>	西日本哲学会

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

信仰と責任——ハンス・ヨナスにおける無力な神——

兼松 誠

導 入

『責任という原理——科学技術文明のための倫理学の試み』<sup>1</sup>によって哲学界に不動の地位を確保したハンス・ヨナスは、一九八四年レオポルド・ルーカス博士賞を受ける。その授賞に対してヨナスが講演したのが「アウシュヴィッツ以後の神の概念」である。ヨナス自身、母親をアウシュヴィッツで亡くしている。アウシュヴィッツという未曾有の悲劇はヨーロッパの思想界に大きな衝撃を与えた。「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である」という『プリズメン』におけるアドルノの言葉はよく知られているが、神学界もまたこの歴史的惨劇に無関心でいることはできなかった。果たして、アウシュヴィッツという悲劇を起さるままに放置した神とはどのような神なのか、アウシュヴィッツ以後、我々は神をどのようにに思考すべきなのか？ ヨナスの講演「アウシュヴィッツ以後の神の概念」は、この問いに答えようとしたものである。

## 「アウシュヴィッツ以後の神の概念」における神の特徴

「アウシュヴィッツは、恐怖と戦慄の範囲について人がこれまでずっと知ることができたものに、そして人間が他の人間になすことができるものに、そしてこれまでもなしてきたことに、一体何を付け加えたのか」——これがヨナスが今日の神学的思考に課している問いである。ヨナスによれば、伝統的な神学は、もはやアウシュヴィッツに答えを出すことはできない。これまではユダヤ人が被つてきた災厄はユダヤ人自身の不信仰によって説明されてきた。しかし、こうした説明はアウシュヴィッツという大惨事には不適切だし、無垢の幼子たちまでもが犠牲になったことを考えれば、こうした説明は不誠実ですらある。

信仰を出発点にアウシュヴィッツを真剣に考えることによって、信仰それ自体を棄て去った一群の人たちは、ユダヤ教の側にもキリスト教の側にもいる。しかし、ヨナスはその選択肢を採らない。それは、沈黙の神に向けられた、アウシュヴィッツの犠牲者の叫びに対する答えが否定されてはならない、とヨナスは考えるからである。あからさまに思弁的な神学において、ヨナスは神の〈概念〉を考察の対象とする。すなわち、神の存在や、神の善性を否定するのではなく、神についての従来の捉え方を、アウシュヴィッツによつてもはや通用しなくなつてしまつた神についての理解の仕方を変革しようとするのである。しかし、我々は、彼のこの試みを表面的に捉えすぎるべきではないであらう。問題は神理解を変えればすむものではないからである。彼の神学は、アウシュヴィッツによつて初めて見えるようになった神との本来的な関係を語ることでありと理解されるべきである。

神がアウシュヴィッツという惨劇を起こるのを許したのは、神が全面的に無力であるからである——この突拍子もない結論、しかし、この惨劇が現に起きたことに対する一つの説明を理解させようとして、ヨナスは自作の神話に訴える。

ヨナス自身が創作した神話によれば、我々が知ることができない原初において、神は断固たる決意をもって生成における偶然へと、危険へと、そして無限な多様性へと自身を委ねた。こうして世界は創造された。しかも、それは全面的な自己制限であり、神はその時、自らの持てる力を全て使い果たしてしまつた。そういうわけで神には、世界に介入し統制したりするための力はや残されていなかった。しかし、その考えは汎神論ではない。ヨナスにおいては神と世界とは同一視されてはおらず、厳密に区別されている。また、それは世界の外部で、何もできないまま世界の展開を傍観している神でもない。ヨナスの神は創造された世界の流れのただなかで漂う存在である。そして、創造に際しての神の能力の全面的な放棄によつて世界の出来事を予測する能力も失われてしまつた。ヨナスは、世界の偶然性の中で何もできないまま常に危険にさらされている神の旅を世界冒険と言っている。やがて、この偶然性の中で生命が、そして人間が世界に登場する。ヨナスによれば、人間はこの無力な神に責任を負いうる存在として登場したのである。人間は、神が世界を創造したことを後悔させてはならない。このようなヨナスの神話から言えることは、神はアウシユヴィツという惨劇を放置しようとして放置したのではないということである。神とは、もともとそのような人間の不幸に介入できる存在ではなかつたのである。アウシユヴィツとは、ユダヤ人がただユダヤ人であるというだけの理由で殺害されたという近代ヨーロッパの人間性に対する危機であるだけではなく、全能の神に対する信仰をも打ち砕いた出来事でもあつたのである。そこにはもはや絶望的な状況しか残されていないように思われるが、しかしヨナスの考察はそこでは終わらない。

ヨナスのいう神概念は次のように整理されることができる。まず第一に、それは苦しむ神である。もちろん、これはキリスト教の十字架の上で苦しむ神のことではない。ヨナスによれば、神の苦しみは既に世界が創造された瞬間から始まつたのである。神は世界の偶然性に身を委ね、永い時間の果てに人間が登場した以降は、人間の行動に一喜一憂せざるをえない状況にあるからである。旧約聖書には、人間のことで思ひ悩む神のことが語られている。

第二に、それは生成する神である。神は時間の中を漂っている。かつて哲学的神学は超時間性、非受動性、不可変性を神

の必要不可欠な属性と考えたが、生成に対立するこれらの属性は聖書の神概念と合致しないとされる。

ちなみに、アングロサクソン圏の神学に通じた人たちからすると、ヨナスのこの神理解はプロセス神学におけるそれを想起させるようである。このことは、クリステイアン・ヴィーゼもその関連性を指摘しており<sup>3</sup>、有機体の哲学を旨指したヨナスがホワイトヘッドをかなり意識していたことを考慮すれば、プロセス神学との比較作業は無視できないであろう。しかし、これについては深く追究しないことにする。

そして第三に、それは配慮（心配）する神である。人によっては、この特徴から、人間のことを天の高見から見守つてくれる神の面倒見のよさを連想するかもしれない。しかし、ヨナスのいう無力な神は、人間に何かをしてやれる力をもっていない。神が人間のことを配慮（心配）するのは、神の創造行為と自身の存在とが、場合によって責任を放棄することさえできる自由を与えられた人間の手に委ねられているからである。生まれたばかりの赤ん坊が母親が抱き上げてくれれば「キヤキヤ」と喜びの声を上げるように、そして赤ん坊のもとを母親が少しはなれば、赤ん坊がその姿を目で追うように、常に恐怖と不安に満ちた状態における神は人間の行為によつて喜びもすれば悲しみもする存在であり、そうであるが故に、人間が気がなつて仕方がないのである。

プロテスタント神学者のE・ユンゲルが述べているように、「通常の神表象に従えば、自己制限は、神の神性に矛盾したものに感じられる<sup>4</sup>」であろう。神の全能性に、さらに「自分で自分を制限する」と付け加えるならば、伝統的な神理解からするとそれは矛盾しているのである。しかし、我々はヨナスの論点を神の全面的な無力性に求めるべきではなく、そこで置くべきではない。我々は、信仰の神と哲学者の神とのあの区別を認識しておかなければならないであろうし、現代では神の全能を指摘することがそのまま神を称賛することにはならないことも弁えておかなければならない。ヘブライズムの神概念をヘレニズムの神概念によつて説明するという、ハルナックによつて「ヘレニズム化」と規定された現象とその問題性——後の世代の神学者たちの重要な課題の一つはこのヘレニズム的要素をいかにして取り除き、聖書の主題すなわち事柄それ自

体に迫っていくかであったと言つてよい。ヨナスの神的全能の否定は、まずこのコンテクストで読まれる必要がある。

ヨナスは、神の自己制限化についての思想をルリアのカバラ思想におけるツィムツム *Tzimtzum* に着想を得ているかのよ  
うな言い方をしている。ツィムツムは収縮や後退を意味する。それによれば、神は世界を創造するために自らを部分的に収  
縮・後退させ、その空隙を世界の場としたのである。しかしヨナスにおいては、その神の自己制限化は、部分的なものでは  
なく全面的であり、しかも後で取り戻すことの可能性もはや存在しないものであった。<sup>⑤</sup> ヨナスが「生成は存在よりも劣つ  
ており、物的な下位世界に特徴的であるという、存在と生成の間で古典的な思想が持っていた存在論的な対立は、生成が  
伴ういずれの暗い側面をも、神性の純粹で究極的な存在から閉め出して」<sup>⑥</sup> いるとして、ギリシャ的、プラトーン・アリストテ  
レス的な、つまりは哲学的な神理解と真に聖書的な神理解とは両立しないと述べている。神は全能で絶対的な存在ではない  
というヨナスの神理解は、繰り返して強調するが、現代神学を背景にして考えれば、それほど奇妙な議論ではない。しかし、  
それにしてもヨナスの神理解は、神が全面的に無力になったという点で際立っている。

ところで、彼の神話は、それが神話である以上、神の決断による世界の創造によつて無力となったヨナスの推測には、そ  
う考えなければならぬ必然性が見受けられない。つまり、彼の神学的議論は弁証法的なものかもしれないが、決して論証  
的なものではない。しかし、我々は、彼にそう思考せしめた何かがあつたと想定しておかなければならない。一体、ヨナス  
は何を念頭においてこの神を語っているのか？

### 神の無力性の議論の先にあるもの

全能者としての神の概念に挑戦するヨナスに対して、当然多くの批判が出てくることは予想される。そうした中で深い学  
識を背景にして、ヨナスの取り組みに呼応して「神の創造的な自己制限は神の神性と矛盾してはいない」と主張するのは、

先に述べたユンゲルである。<sup>①</sup>

ユンゲルによれば、原初的端緒における神の創造行為とは、同時に創造的自己制限化の行為である。それは、それ自身の被造物によつて制限を受けるということを意味している。つまり、創造における「原初的端緒は、神はある他者に一つの端緒を与えるということの意味している」のである。その他者は、神的存在に對立する端的に他なる存在である。神と等しいものと見做されることを、最初から神に拒まれていたという仕方でも異なっているこの他者は、神に望まれた他者でもある。神がその他者を自らの傍らにもつことで、神はその他者によつて制限されているのである。

それでもユンゲルは、神の創造的な自己制限は神の神性と矛盾してはいない、と述べる。「神は主権者であり自由である」と言い、そして「神は自分で自分を制限する」と付け加えるとしたら、自分は自己矛盾を定式化してはいないかと、人は思うかもしれない。世界内在的な関係においても、真理において自由な存在は、自身の自由の制限を知っており、まさにそのことによつて、まず第一に、真理において自由である。そういうわけで、ユンゲルによれば、自己制限という契機は神性に何も矛盾してはいない——「無からの創造が神の神性の表現であるならば、他なるものの始まりをもつて原初的端緒に自分自身で矛盾を与えるものとしての神の創造的自己制限は、神の本質に属している行為である。」

こうして、神的無限性という伝統的な形而上学的神概念は修正を余儀なくされることになる。自分自身を制限することとは、神にとっては馴染みのないものではなく、むしろ本質的なことではないかとユンゲルは考える。

このように、神の全能という考え方に対する批判は「より新たな神学的構想」と一致しているというのがユンゲルの評価である。しかし、ユンゲルはヨナスに完全に同意しているわけではない。何故なら「彼によつて批判された形而上学的な神の概念に彼は：緊密に結び付けられている」とユンゲルは考えているからである。それは彼の見るどころ、こうした「形而上学の神を、確かに放棄された実体として考えてはいるが、放棄の様態において、依然として実体として考えているのであり、関係論的存在としては考えていない」ことから帰結してきている。

「關係論的」ということによつてユンゲルが考へているのは三位一体論的な關係であらう。それ自身において、父として、子と聖靈を通じて、それ自身を制限することは、永遠なる神にとつて本質的である。そしてさらに、愛する者がそれによつて愛されている他者のために自身を無効化するということは愛にとつて本質的である。そして、神は、神において永遠から生じたものを、同じ様な仕方での創造の行為において取り戻すのである。結局のところ、ユンゲルによれば、神が自己を制限するということは、神が自己の神性を愛の三一論的な交わりを通じて規定されるということなのである。しかし神が創造の行為においてそれ自身を取り戻すとき、神は神として取り戻すのではない、「神が自身の傍らに、その神的な存在と本質の傍らに、他なるものに対して現存在と本質を提供し、空間を差し出し、時間を与える」という意味において取り戻す」のである。

しかし、ヨナスの「神は全くもつて受け取る者である」。ヨナスの神と被造物との間には与え与えられるという關係がない。創造に際して、全面的に無力になつた神はもはや人間に何も与へることができない。まさにそこに、ユンゲルは、聖書によつて三位一体論的な神思想を仕上げることを迫られたキリスト教神学とヨナスとの決定的な違いを認める。ヨナスの神が全くもつて受け取るだけであるのに対して、「キリスト教神学は、自ら死へと赴く神が死を克服することを明確にしようとして、ただひたすら、十字架において苦しむ神を指し示すことができる」。イエス・キリストが十字架において経験したのは確かに神の無力ではあつたが、それは同時に愛の全能であつた。パウロが定式化したように、愛こそが全てを受け止め、全てを耐え忍ぶことができるからである。かくして死を受け止める神の子は死を克服する。愛は、生のための、生と死の統一性として規定される。それ故、アウシュヴィッツという悲惨な状況下にあつても「神を善なる神と呼ぶことが、そして善なる神として賞賛することが可能である」とユンゲルは言う。

人間に死をも克服する愛の全能を教えるキリスト教の三位一体論の教説と照らし合わせて見ると、「ヨナスは創造されたものの存在を、創造者の傍らの存在として考へているわけではなく、創造者自身とは異質な存在として考へている」ものと



映る。そしてさらに神は、ヨナスにおいてはもはや何も与えるものをもっていないので「あらゆる善なる贈り物の現在のな授け手」として理解することはできない。ヨナスのこの思想は、「神が生成する世界に自身を投げ与えてしまった後、神は与えるべきものを何も持っていない。今度は、人間こそが神に与える番である」というテーゼにおいて頂点に達する」。

ヨナスの神学的議論は、アウシュヴィッツにおいて人間としての尊厳を剥奪され死んでいった人たちにどんな慰めの言葉を与えてやることができるのか、と人は問うかもしれない。ユンゲルの批判もそうした疑問を共有していると言えるであろう。しかし、キリストにおける愛の全能という思想を維持しえているユンゲルが、ヨナスの無力な神の議論において見落としてしまっている問題がある。それはヨナスが人間の神への責任を強調していたということである。神への責任において、救う側と救われる側の関係は完全に転倒される。これが「アウシュヴィッツ以後」なのである。

### 責任の対象としての神

ユンゲルはヨナスを評価しているわけだが、結局のところ、ヨナスの神思想における根本的なところを読み取れていないとの印象を受けるのは、彼においては、神への責任を説くヨナスが同時に『責任という原理』の著者でもあった事実が抜け落ちてしまっているからかもしれない。もちろん、ユンゲルもまた神への「責任」を語る。しかし、それは「創造者とその創造的行為を責任的に、そしてできるだけ明確に言葉へともたらし、そして思考する」という形においてであり、全面的に人間に委ねられた神に対する責任を強調するヨナスとの違いは明らかである。

ヨナスが、我々は無力な神を助けなくてはならないと語るとき、それは当然、神に対する信仰を棄ててはならないと主張しているわけだが、それは単に神を賛美することなのであろうか？

ヨナスは『物質、精神、創造』において、アウシュヴィッツで命を落としたオランダ系ユダヤ人女性エティ・ヒレスムの

日記を引用している。

「神が私をもはや助けられないなら、私が神を助けなくてはならない。できる限り神を助けるよう、常に努力することにしよ」<sup>(8)</sup>

この引用箇所からわかるように、ヒレスムにとって神とは人間による保護の対象である。すなわち、彼女においても、神とは人間を救うことができる存在ではなく、逆に人間によつて助けてもらわなくてはならない存在なのである。母親が幼子にやさしく語りかけるようなヒレスムの言葉に、ヨナスは信仰の本質を見た。しかし、ヨナスは、今度は人間が神に与えなければならぬ、人間が神を助けなければならないというが、『アウシュヴィッツ以後の神の概念』を見る限り、具体的に何をすれば、この要求を満たしたことになるのかははっきりと述べていない。今日我々が読むことのできる彼の諸著作は、それほど理路整然と秩序付けられたものではなく、それぞれが複雑に参照し合い、そして絡み合っている。そういうわけで、『アウシュヴィッツ以後の神の概念』だけでは、彼の議論に見えてこない部分がどうしても生じて来ざるをえない。

『アウシュヴィッツ以後の神の概念』における全面的に無力なる神の概念は、ルオポルド・ルーカス博士賞の受賞講演での発表ということもあって、いかにもユダヤ思想を背景としているかのようにヨナスは語っているが、実はそうではない。ましてや、この講演で初めて提起された神の概念でもない。ヨナスは既に一九六一年の『Ingersoll Lecture』における発表がもとになった「不死性と現代的気分」において、すなわち一九六六年公刊の『生命という現象——哲学的生物学に向けて』の第一論文において、ユダヤ教とは全く関係のない文脈でこの概念を突然——あたかも人間に自身を委ねる絶対的に無力な神についての考え方をグノーシス主義もしくはマニ教から得てきたと思わせるかのような言い方で——提出している。この論文を収録している『生命という現象』は、グノーシス研究から生命の哲学的研究へ向つた段階のヨナスの業績を代表す

る著作であるが、これに続くのが彼を一躍有名にした『責任という原理』である。

『責任という原理』は「一応宗教を前提にしない倫理学の著書ということになっているが、『アウシュヴィッツ以後の神の概念』における無力な神に対する責任の概念を理解する上で無視することができない。ヨナスは、そこにおいて、人類の存続の危機を引き起こしている科学技術の暴走に有効に対処できない「従来の倫理学」の前提である人格の相互性を、倫理学の出発点としては退ける。人格の相互性を原理とする「従来の倫理学」が不要であるわけではないが、倫理学一般と「従来の倫理学」を同一視する今日の風潮に疑問が提出される。コミュニケーション理性に基づいて倫理学における普遍性を擁護するドイツ討議倫理学がヨナスに対して論陣を張った理由がまさにここにある。要するに、責任倫理学とは——自然に一切の価値を認めない、自然と人間の連続性を認めない、そうであるが故に人間学から出発せざるを得ない——近代倫理学に対する批判なのである。未来世代を配慮する倫理学を構築するために、人格の相互性を前提にしない非相互性によって倫理学は基礎付けられなければならない。その非相互性においては、力のある者が力のない者に責任を負うものとされている。責任とは力の関数であると言われる所以である。この非相互性の典型は、ヨナスによれば、乳飲み子と親の関係である。しかし、それは、これまで一般に受け止められてきたような、単に一つのわかりやすい事例なのではない。我々は乳飲み子が、彼によって、同時に責任の原初の対象と呼ばれていることに注意しなければならない。

『責任という原理』は、自然に生命を生み出すものになるようなものがあつたと想定する形而上学を前提にしている。『責任という原理』における倫理学の基礎としてのこの形而上学はすでに『生命という現象』においてヨナスがすでに提示していたものである。

今日の機械論的自然観に従えば、自然に独自の目的と価値とを認めるといふ考えは認められないであろう。しかし、ヨナスは有機体という存在の形式から、自然にはもともとそれを生み出す素質があつたと考えるのが妥当で、それが自然に對する相応しい評価だと考える。有機体は、物質に依存しつつも、それと完全に一致してしまふのではなく、新陳代謝を通

じて自己の形相を絶えず維持し続けている。ヨナスによれば、この新陳代謝こそが自由の最初の形式である。アメーバのような原始的な生物にもそれは認められなければならない。有機体は、常に自らの存在を氣遣い、できるだけ長く生きようと努力し続けなければならない存在である。そしてさらに、ヨナスは生命の物語は決してサクセス・ストーリーではないと言<sup>⑩</sup>う。何故なら、生命には死が付きものであるからである。生きている個体は、やがて無に呑み込まれてしまう存在である。言い換えれば、生命とは存在と非存在の間を漂う存在であるということである。生命とは本質的に傷つきやすい存在なのである。このことは、冷酷で無関心な物質的世界のただ中で、誕生した直後の個体に対して最も当てはまるはずである。

ところで、ヨナスによれば、乳飲み子は存在と当為が見事に合致した事例である<sup>⑪</sup>。つまり、乳飲み子に対する配慮から道徳的基礎を引き出そうとしており——その解釈とその評価はヨナス研究の内側でも意見が分かれるであろうが、ここでは議論をそのまま進める——、乳飲み子への全面的な関与に倫理学の可能性を見ているのである。ヨナスがはっきりと述べているわけではないが、我々は倫理的であるから乳飲み子を助けるのではない。乳飲み子を助けるからこそ倫理的なのである。未だ倫理的状况が成立していない段階で、乳飲み子のもとへとおもむき、その命を助ける行為の特質をヨナスは責任と呼んだのである。倫理的状况が未だ成立していない段階での行為であるが故に、その行為の動機を倫理学は原理的に説明できない。ヨナスが「見ればわかるだろう *Sieh hin und du weißt!*」<sup>⑫</sup>と言いつつ切った理由がここにある。行為の動機の釈明可能性はすでに倫理を前提にしてしまっている。しかし、ヨナスは倫理的な何かが成立する原初的出来事に言及しているわけであり、何故乳飲み子を助けなければならないのかという問いはそもそも責任倫理には原理的にありえないのである。つまり、責任の原初的対象としての乳飲み子は倫理学的反省そのものの限界なのである。しかし、ヨナスの洞察によれば、それでいながら乳飲み子への責任的取り組みは、倫理学の、ヨナスの言葉で言えば「従来の倫理学」の土台を提供する。その意味で「従来の倫理学」は責任の倫理学によって基礎付けられなければならないのである。従って、ヨナスの責任の倫理学と「従来の倫理学」の関係を、ケアの倫理学と正義の倫理学の相互補完的な関係の一つのあり方とする理解は、そこにおいて暗に

示されている倫理学の發生論を見落としてしまっているように思われる。両者の関係は、むしろノルマ・ノルマンス〔基礎付ける規範〕とノルマ・ノルマータ〔基礎付けられる規範〕の関係なのである。ノルマ・ノルマータとしての「従来の倫理学」がひとたび確立されて、それが一人歩きし出し、起源的なものを忘却している危機的状况が科学技術文明なのである。

倫理学は形而上学によって基礎付けられなければならないというのがヨナスの主張であるが、その形而上学は、独自の目的と価値という主観的なものや内面的なものを自然に認めるものであったこと、そして責任の原初的対象としての乳飲み子が存在と当為の見事に合致したものであることを考えると、乳飲み子は形而上学と倫理学とを媒介する極めて重要な存在ということになる<sup>14</sup>。従って、乳飲み子とは形而上学を背負った存在である、あるいは彼の形而上学は乳飲み子の由来を憶測的に表現したものであるということが出来る。

再び神の問題に戻ると、ヨナスによれば、神は全くもって無力な存在であり、我々によって助けてもらわなくてはならない存在であった。つまり、神は責任の対象なのである。ここまで来ると既に明らかであると思うが、ヨナスの神学における全面的に無力であり、責任の対象としての神は、彼の倫理学における、存在と無の間でただおびえるだけの、責任の原初的対象としての乳飲み子と非常に重なる概念であるように思われる。もちろん、『アウシュヴィッツ以後の神の概念』を読むだけでは、無力な存在となった神から乳飲み子を着想する必然はないかもしれない。しかし、『責任という原理』を読んだ者なら、このような神から、あの乳飲み子を想起しないことの方がむしろ難しいであろう。もちろん、ヨナスはこのことをはっきりと述べているわけではないが、あと一步踏み出せば、読者にそう結論せざるをえない地点にまで彼は導いていたように思われるのである。

ナチズムの暴力が吹き荒れていた時代、絶望的な状況にあつたユダヤ人たちは「このような世界に子供を産むべきではない」と真剣に議論したという。これは『責任という原理』の著者が、今度は逆に、後の『アウシュヴィッツ以後の神の概念』<sup>15</sup>の著者でもあることが忘れられていけば、何気なく素通りされてしまう箇所である。この言明において確認されるのは、絶

望的狀況下における、我々と生まれてくる小さな命との断絶であろう。ヨナスはこれをベシミスティックだと考える。それは『責任という原理』によれば、そこにあるのは責任の不在であるからであるが、『アウシュヴィッツの神の概念』によれば、それはまさに信仰の不在であるからである。「このような世界に子供を産むべきではない」という原初的対象としての乳飲み子に対する責任の不在に對置されるべきなのは、「私が神を助けなくてはならない」という絶望的狀況下におけるヒルスムの責任的な告白である。アウシュヴィッツにおいては、奇跡は人間の側から為されたと言ナスは言う<sup>16</sup>。相反する二つの言明は、一つの同じ主題を巡って為されている。

個体として滅びてゆく宿命を背負った人間存在にとつて、次の世代の子供を生み育てていくことが根本的な重要を持つていとすれば、「このような世界に子供を産むべきではない」と人々に言わしめる狀況ほど、悲惨で絶望的な狀況はない。「私が神を助けなくてはならない」という告白は、ヨナスが乗り越えようとしたニヒリズムに対する徹底したアンチテーゼであり、次世代に対しては責任的なものであり、そして同時にアウシュヴィッツに対する決定的な答えである。神に對する信仰においても、乳飲み子に対する責任においても、奇跡は常に人間の側から為される——確かにそうであろう。

絶対的に無力な神など、果たして我々の信仰の対象になりうるのか、と人は訝るかもしれない。しかし、そのような疑念を抱く人は、未だ「アウシュヴィッツ以後」を思考していない。全能なる神への信仰は、知らず知らずのうちに、神と人間との不遜な相互性と連続性を前提にしている。全能である神への信仰には、神が人間に何かしてくれる——それには良いものもあるだろうし悪いものもあるだろう——ことの期待が含まれている。何もしてくれない神に用はないということである。未来倫理学の提唱に對して、一体の未来の人間が現在の我々に對して何をしてくれるのかという相互的発想は障壁であった<sup>17</sup>。ヨナスは、この相互性によつて倫理学が、その根底においても毒されていることに危機意識をもっている。相互性それ自身が問題なのではない。相互性の倫理学としての「従来の倫理学」の根底に位置する倫理学の原理に對しても無反省的にそれが適用されていることが問題なのである。人間中心主義の問題はそこに位置している。責任の倫理学とは、倫理学が人間学

になつてしまふことに対する否である。宗教化してしまつたキリスト教を批判したかつてのカール・バルトに似た発想をヨナスは共有している。いずれにせよ、そういうわけでこの相互性をヨナスは批判の対象とせざるをえなかつた。それは、責任倫理学の本来性が發揮される場を確保するためであつた。今度は我々こそが神を助けなければならぬという無力な神に対する信仰においては、乳飲み子に対する責任と同様、相互性とは違つた、つまり人間的要求から全くもつて遠ざけられた発想、もしくは倫理的態度が要求されるのである。そういうわけでヨナスの信仰論は、極めて責任的であり、倫理的である。我々が神とは思いたくない神こそが神である。そのことが、信仰が責任としても再発見されつつ、深く認識されなければならぬ神学的状況こそが「アウシュヴィッツ以後」なのである。ヨナスの神概念の提唱に対して、今なお全能の神に固執する人は、神と人との關係を連続的に捉えているのである。しかし、その連続性に繋縛されている限り、そして神を前にしての信仰の挫折を知らない限り、眞の信仰は起こりえない。ヨナスの考える責任としての信仰は、人間的要求から神へと至る道が一切閉ざされた上で、ただ弁証法的にしか理解されないものである。

## 総括

グノーシス主義、生命の哲学、責任の倫理学、そしてアウシュヴィッツ以後の信仰といったように、ヨナスの研究は多岐に渡る。このヨナスの全体像をどう捉えるかは、ヨナスの研究の大きな課題であろう。ヨナスは形而上学を重視しているけれども、普遍的な哲学的命題を積み重ねて体系化していくという手法は取っていないように思われる。ヨナスの思想の全体を捉えるという作業は、彼の思想の論証過程を追うことによつてよりも、彼は一体何を前提にして議論を拡充していったのかという問いの形式のもとで展開されるべきだと思われる。つまり、彼は何かを前提にして、形而上学や神学を論証したのではなく、語つたのである。そうであるが故に、彼の哲学はとくに形而上学や神学においては推測的であり神話的であるの

である。彼の一連の著作において特徴的である、同じ話の繰り返し多さ、そして自分の著作の相互参照も、恐らくヨナス独特の手法から帰結してくるものと考えざるべきである。それでは、彼は何を前提にしてそれらを語ったのか？

その一つとして軽視されてはならないのが、既に指摘したように、乳飲み子であると筆者は考える。乳飲み子とは、ヨナスの思想によって発見されなければならない主題であり、そして責任と信仰の対象として弁証されなければならない主題であった。『アウシュヴィッツ以後の神の概念』の重要性は、それが神義論的に神を擁護しているということのうちににあるのではなく、そして神は全面的に無力になったとラディカルな主張をしているということのうちににあるのでもなく、これまでヨナス研究においてほとんど中心に取り上げられることがなかった、『責任という原理』において登場する責任の原初的な対象としての乳飲み子が、ヨナスにとってはどれほど重要な隠された主題であったかを暗示していることの中にあり、ように思われる。ヨナスの『アウシュヴィッツ以後の神の概念』は、『責任という原理』の再読を要求している。つまり、それは『責任という原理』において、責任の原初の対象とされた乳飲み子が、ヨナスにとっては何であり、どれほどの重要性をもっていたかを示唆しているのである。

生命は自己目的を持っているというのがヨナスの見解であるけれども、乳飲み子にはそれを実現するだけの能力は備わっていない。乳飲み子とは存在と非存在の間で、非存在から存在への生成の過程で宙づりになった存在である。乳飲み子とは我々によって愛されるままに愛され、そして棄却されるままに棄却される存在である。乳飲み子とは、自らの存在の可能性を完全に我々に委ね渡してしまっている存在である。もし筆者の見解が正しいとすれば、ヨナスによれば、そうした乳飲み子とは、創造の際、自らの力を全面的に使果たし、放棄し、人間の自由を認めつつも、人間からの応答を静かに待っている神的存在なのである。乳飲み子とは神として無力なのであり、神は乳飲み子として無力なのである。乳飲み子に対する責任は、その都度、我々によって無力な神に対する信仰としても再発見されなければならないのである。『責任という原理』と『アウシュヴィッツ以後の神の概念』という、一見すると相互的な関連性を見出し難いこれら二つの著作は同じ主題をめぐって



書かれてゐるであらう。

## 注

- (1) Hans Jonas, *Das Prinzip Verantwortung, Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*, Frankfurt a.M.1979. (以下、PVと表記)
- (2) Hans Jonas, *Der Gottesbegriff nach Auschwitz. Eine jüdische Stimme*, Suhrkamp Taschenbuch 1516, Frankfurt am Main 1987, S.10. (以下、GAと表記)
- (3) Christian Wiese, *The Life and Thought of Hans Jonas: Jewish Dimensions*, Brandeis University Press, Waltham, Massachusetts, 2007, p.126.
- (4) Eberhard Jüngel, Gottes ursprüngliches Anfangen als schöferische Selbstbegrenzung. Ein Beitrag zum Gespräch mit Hans Jonas über den "Gottesbegriff nach Auschwitz" (1984), in *Gottes Zukunft, Zukunft der Welt*, hrsg. v. Hermann Dausler [et al], München, 1986, 54-61. この論文からの引用頁は以下に表記した。
- (5) 神学的観点から A. Goldberg は「ユダヤ教は、<sup>1</sup> 異端的なものであること、<sup>2</sup> 多くのことを信じていることが多々あり、断った上で、それでもヨナスの「神はその力を最終的に断念した」という結論<sup>3</sup>、そしてそれ故審判を待たなければならない」という結論は「ユダヤ教あるいはキリスト教」の神学からすると受け入れることができないと述べた<sup>4</sup>。Arnold Goldberg, *Ist Gott allmächtig? Was die Rabbinen Hans Jonas antworten könnten*, *Judaica* 47, 1991.
- (6) G.A.S.27-28.
- (7) ちなみにユンゲルは、彼の一九六五年の著書の脚注において、すでにヨナスの神概念に言及するなど、はやくからヨナスの神学思想に注目していた神学者の一人である。Eberhard Jüngel, *Gottes Sein ist im Werden. Verantwortliche Rede von Sein Gottes bei Karl Barth. Eine Paraphrase*, Tübingen, 1965, S.97. (Anm.98), S.100. (Anm.116) この時、ユンゲルが読へて

- らたの<sup>14</sup> Hans Jonas, *Nichts und Ewigkeit. Drei Aufsätze zur Lehre vom Menschen*, Göttingen, 1963.
- (8) Hans Jonas, *Materie, Geist und Schöpfung*, Suhrkamp Taschenbuch 1580, Frankfurt am Main, 1988, S.60.
- (9) Hans Jonas, *Immortality and the Modern Temper, The Phenomenon of Life: Toward a Philosophical Biology*, Northwestern University Press, 1966. (以下、PLと表記)
- (10) PL, p.4, への観念からヨナスはポスト・ユークミンの批判を加える (PL第三論文の補論を参照せよ)。
- (11) Vgl. PV. Viertes Kapitel. VII Das Kind - Urgegenstand der Verantwortung.
- (12) Matthias Kettner, *Verantwortung als Moralprinzip? Eine kritische Betrachtung der Verantwortungsethik von Hans Jonas*, *Bijdragen Tijdschrift voor Filosofie en Theologie*, 51, 1990.
- (13) PV, S.235.
- (14) 同じように、パンサーは、人間の行為に直面しての自然の無垢と傷付をやすらと、責任の原初的対象としての乳飲み子の観点から、ヨナスの形而上学と倫理学の連続性を確認している。彼女によれば、自然は、その形式の豊穡によって、そしてその成就の純粋性によって神的なものを喜ばせる幼子のようであるの<sup>15</sup>である。Marie-Geneviève Pinsart, *Hans Jonas et la liberté. Dimensions théologiques, ontologiques, éthiques et politiques*, Paris, Vrin, 2002, p.47, 46, ヨナスの思想における乳幼児の重要性に關しては、*ibid.*, p74, note[5]。
- (15) PV, S.88.
- (16) GA, S.41.
- (17) PV, S.84.

(かねまつ・まこと) 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化科学研究科博士後期課程一年)